寄する波 返す波 第二十三信

屏風岩中央カンテ　発送御案内

厳しかった冬が去り、満開だった桜も散り、瑞々しい新緑の季節となりました。
桜花爛漫、万朶の桜、と言いますが、花の命はあっという間の一週間だ、と、思えばこそ、その華やかさが心に染みるのでしょう。
西行は桜をこよなく愛し、山家集には、なんと百余首もの歌を書き残しています。
その華やかな桜を西行は、はかなさ、と捉えていたようです。

風さそふ花のゆくへは知らねども 惜しむこころは身にとまりけり

西行　山家集一三四

西行の歌につられてのことなのか、歳を重ねてきたからなのか、花の命の短さに思いが一層深まっていって、すでにこの世を去った忘れられない友のことを、しきりに思い出します。そしてまた近ごろは、人が生きていくには、心の支えとなる柱が必要なのだ、と、しみじみと、そう思います。
私にとってのその柱は、山の世界、大自然の世界であり、そこでともに語り合い、心を通い合わせた友の存在だったのです。
本信では、今も私の心に生き続けている山の友のことを書きました。
一人ひとりが生きていく、その柱のことを考えるよすがとなれば嬉しく思います。
右、ご案内まで。

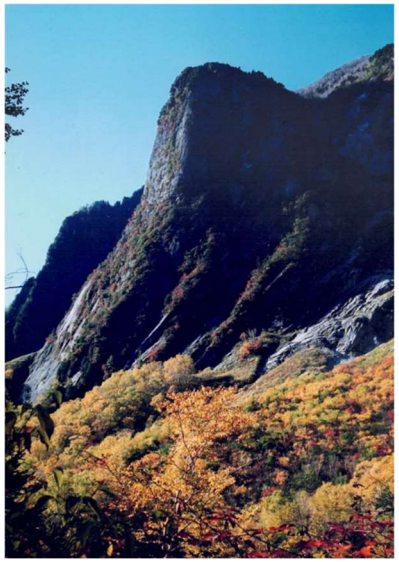
夜桜　速水御舟
昭和三年　三十四歳

二〇二五年四月二十五日

勝俣亭山人

寄する波 返す波 第二十三信

屏風岩中央カンテ



紅葉の裾野に立つ屏風岩

横尾本谷より

プロローグ

昨年秋から新年明けにかけて、いろいろと取り込みのことがあり、ついエッセイも書けずにいましたが、その中で実は、もう一度会いたい、というタイトルが閃いていて、それが徐々に膨らんできていました。

そして、さて書こうとして、そのもう一度会いたい人、生前、なんの屈託もなく、心を通い合わせてきた人たちの、いかに多いことか、と改めて驚いて、どこからどう書けばいいのか、誰のことを書けばいいのか、とそれが分からなくなっていました。

頓挫してしまっていたのです。

そして、さまざまなことに思いをめぐらせているうちに、私がこれまで生きてきたその柱となっていたのは、やはり山の世界だったのだ、と思い至りました。

山の世界、大自然の世界、それに寄り添うようにして音楽の世界があり、書物の世界があったのです。この柱があったからこそ、私は先達に恵まれ、心を通い合わせた友に恵まれ、生きがいのある日々を生きてこられたのだと、今、しみじみと思い返しています。

そこで、その山の世界の中で、どうしても忘れることの出来ないひとりの友のことを書こうと思います。

神戸山岳会の盟友、萩原邦一君。その出会いのことから。

その出会いは、六甲山の尾根道を歩いている途中でのことだった。
このとき、私十九歳、萩原二十二歳。
この日から萩原は、私にとって、終生忘れられない山の友となった。この出会いをきっかけに私は日本の山岳会での名門神戸山岳会に入会することになったのである。
この出会いのことを、若人諸君へ第十三信「木曽御岳」に書いているので、すこし長くなるが抜粋して写す。

私は一人で山を歩くのが好きであった。
学校の先輩には優れた岳人が多く、その人たちは戦前の昭和十五年、藤木久三氏を顧問として設立された日本山岳界でもトップレベルにある神戸山岳会に属しており、日本の登山界に於けるリーダーであっただけでなく、戦前にはヨーロッパアルプスにその足跡を残している人たちもいた。
当然私も入会を随分奨められたがどうしてもその気になれなかった。
山は大勢でワイワイガヤガヤと登るものではなく、一人で静かに味わうものであるという強い気持ちがあった。
今でもこの考えに変わりはない。私は拘束されるのが嫌だったのである。例会の合同トレーニングや合宿などまっぴらご免であった。・・・・しかし未熟だった。

或る日のこと無謀にもオーバーハングに挑み、充分なハーケンも打たず、吊り上げ技術も知らぬままに腕力だけで突破しようとして力尽きて墜落したのである。
場所は前述の中山惣河谷奥壁。十米を落ちて気を失ったが奇跡的に怪我だけで済んだ。
それでもまだ神戸山岳会の門を叩こうとは思わなかった。相変わらず意地のように孤独を求めて山へ入っていった。
昭和三十二年の夏の終りの或る日、台風がやって来た。その翌日、さぞかし沢が綺麗だろうな、と思って六甲山系の大月地獄谷へ入っていった。
最後の二十米の大滝をザイルを使って登っているパーティを横目に一人でさっさと登り切って摩耶山に向って歩いていたとき、私と前後して歩く男がいる。やけに足の速い奴だなと思っていると先方でもそう思っていたと見えて私に声をかけて来た。
「どちらの会の方ですか」と聞く。
「いやどこの会にも入っていません。あなたはどちらの会ですか」と言うと
「神戸山岳会の萩原です」との事。
私は驚いた。どうしても頭から離れない会の名前である。念の為に
「前田さんのところですか」と聞くと今度は相手が驚いて
「前田さん？　会長のことですか？　どうして知っているのですか」
「イヤ、学校の先輩なので」
ということで二人で歩き始めた。

この萩原、私より二才年長、終生忘れられぬ友となる。
当時三菱重工神戸造船所に勤務しており、山については限りない情熱を持ちアルピニストとしても第一級の人物であった。
この日萩原はザイルを持って来ていて
「摩耶山の一つ手前の尾根に、山羊の戸渡り、という岩稜がある。最後は谷に向って切れていて、そこを降りるつもりだけど一緒にどうですか、ザイルもある」と言う。
「それは面白い是非よろしく」という訳でこの山羊の戸渡りを三度ばかりザイルを使って懸垂下降で降りた。
こういうときのザイルワークで、お互いの技倆というのは良く分るものである。私は内心、こういうパートナーが居ればどこへでも行けるな、と思ったことをよく憶えている。
萩原も同じような思いをもったとみえて「是非一度会へ遊びに来て下さい」と言う。
更に話が弾み、偶然、私がその年の秋、前穂高東面の奥又白へ行こうと思っていることを言うと「エッ、実は我々も奥又白へ入る予定です。そこで会えたら嬉しいですね」と言うことで再会を約して別れた。

さて、この奥又白である。井上靖の有名な小説「氷壁」の舞台となった前穂東壁がある。
前穂東壁は、梓川、新村橋を西へ奥又白の池に至り、ここから前穂高頂上、三〇九〇米へ、一気に突き上げている。取付基部から殆ど垂直に二百米、奥又白の池辺りからだと四百米の高度差を持つ豪快な岩壁である。晴れた日だと梓川の明神から横尾へ至る途中で前穂高を見上げるとこれを遠望出来る。
私はこの岩壁を登りたかった。

ここに困ったことが起きた。肝心の奥又白の池へ入るルートが分らないのである。
困った私は意を決して神戸山岳会の前田会長宅を訪ねた。
前田さんは私が神戸山岳会への入会希望を持って来たと思ったらしく、機嫌よく私を迎えてくれたが、私が
「どうもよく分らないので奥又白へ行くルートを教えて下さい」と言うと顔色が変わった。
「奥又へ何しに行くんだ」
「前穂東壁を登ります」
「なんだと？　前穂東壁？　馬鹿者め！　お前みたいな奴が山で遭難するんだ！　奥又へ入るルートも分らぬ奴が東壁を登るなどとはとんでもない。絶対に駄目だ、帰れ帰れ」
と怒鳴りつけられた。
奥様が出て来ていろいろとりなしてくれたが、前田さんの怒りは一向に収まらない。
このとき私は、萩原が奥又へ行くと言っていたのを思い出し、
「それでは神戸山岳会が秋に奥又へ合宿に入ると聞いていますのでこの際私も覚悟を決めます。神戸山岳会に入れてください」と切り出した。

「誰に聞いた」
「萩原に」
「萩原だと？　大体あいつも無茶をする傾向がある。駄目だ駄目だ。萩原が何を言ったのか知らんが、お前みたいな奴は断じて入会させられぬ。帰れ帰れ」と全く話にならない。
私も流石に腹が立って来た。
辞を低くして頼んでいるのに何も教えてくれないばかりか、入会の申出に対しても、ただ、帰れとは何ごとだ。それでも先輩の後輩に対する態度か。もう金輪際、神戸山岳会なんかに入るものかと、その日はそれで帰ってしまった。
しかしその後いろいろ調べてみたが、奥又へ入るルートはどうしても分らぬ。加えて、前穂東壁は第一級の岩壁である。本音で言えば聊か自信がない。全く未経験の世界なのである。
ましてや、肝心のパートナーは甚だ心許無い。前田さんには腹が立つが、そう言われるのも無理はないと思い、この奥又白は断念したのである。
今にして思うがこのとき無理にでも行っていたら多分死んでいただろう。前田さんは、私を完膚なきまでに怒鳴りつけねば、何をしでかすか分らぬ、放っておくと、こいつは死ぬかも知れぬ、と本気で心配してくれたのだと思う。

奥又を断念した秋の終り、場所は良く覚えていない。多分六甲でも有数のゲレンデ、保塁岩だったと思うが、偶然萩原と再会した。
「奥又白へ行ったらテントが一張りあったので、ひょっとして、と思って覗いてみたけど、違っていた。いつ行ったのですか」と聞くので、どのみち例の件はばれるに違いないと思い、ことの顛末を話し大笑いになったところで、
「今度小豆島の拇岳に行くので一緒にどうです」と言う。
拇岳は、小豆島寒霞渓の奥にある拇の形をした美しい岩峰である。私は無論、快諾をした。
このときの山行は楽しかった。夜、神戸港から関西汽船に乗り込み甲板に寝袋を持ち出して、濃い水色の空にちりばめられた星を眺めながら寝るのである。
なんと大らかな時代であったことか。
神戸山岳会メンバーとの拇岳岩峰登攀は私に入会を決意させた。

私の入会については随分揉めたことを後で知った。前田さんは矢張り
「あんな奴は必ず自分勝手なことをして遭難するに違いない。危ないから止めろ」と言ったそうである。
これは的を射た発言である。私は団体行動が死ぬほど嫌いなのである。
私の入会を支持してくれたのが萩原であったことは勿論だが、前田さんから見ると、萩原も危険人物の一人である。これも慧眼で後に萩原は矢張り独自の道を求めて会を去ることになる。
今は消息不明とのことだが、何とかして会いたいと願っている。

神戸山岳会に入会したその年の暮に、木曽御岳の冬山合宿に参加して、そのすぐあと二ヶ月後に、鹿島槍ヶ岳二八八九メートルに挑戦した。

鹿島槍ヶ岳は端正な双耳峰を持っていて、その二つのピークを結ぶ尾根、吊尾根に私たちは、猛吹雪の中、閉じ込められたのである。

鹿島槍ヶ岳　二八八九メートル
双耳峰、南峰と北峰、吊尾根
五龍岳より　遠望

このとき、閉じ込められたテントの中で、萩原はどうしたか。

若人諸君へ第十八信「鹿島槍吊尾根」に書いているので、抜粋して写す。

ぼんやりしていた頭がこの時はっきりと目覚め、気がついた。

テントが雪に埋まっているんだ！

フレームは内側にねじ曲がり、内張りの布が顔に覆いかぶさっている。

真っ暗の中で、風の音が遠くにあるように聞こえる。

「おい、起きろ、岸本起きろ、萩原起きろ、テントが雪に埋まったぞ！」

もぞもぞと起きだした岸本と萩原だが、事態を察知した後の行動は早かった。

ものも言わずにピッケルを振るってテントの入口とベンチレーターを交互に必死で突き崩し、苦闘数十分、遂に穴があいて、そこから雪もろとも冷たい風がどっと吹き込んで来た。

にごった空気が一気に吹き払われ、私達は大きく息を吸い込んだ。

昭和三十三年三月、鹿島槍吊尾根。

猛烈な吹雪の中に孤立した、ウィンパー型テントでの朝であった。・・・・・・・

そしてその吊尾根に閉じ込められたのである。

一歩の前進も半歩の後退も出来ない、ただ只管、耐えるだけの日々が始まった。

この日の前日、私たちは夕食を大奮発をして、すき焼きにした。山行最後の日の分を繰り上げたのである。これが大失敗であった。

大失敗だったというのは、この夜があまりにも見事な快晴であり、まさかその夜中から山が荒れ始め、数日に亘りここに閉じ込められるなどということは全く想像せず、いい気になって、すき焼きなどして油断していたことである。

夕食後萩原が、食べ残した福神漬の袋を手に持って

「おい、もういらないな、捨てるぞ、いいな」

と、念を押した上で、テントの入口を開け、信州側へ向かって放り投げた。・・・・・

それにしても猛烈な吹雪である。テントは強風に煽られてバタバタと揺れ、内側に張ったフレームがねじ曲げられる。

雪はどんどん吹き付けて来て、一時間毎に交替で外へ出て除雪しないと、あっという間にテントが雪に埋まってしまう。

視界は全くきかない。ほんの数メートル離れると何も見えない。

除雪作業で外へ出る時は完全装備をして中からザイルで確保した上でないと何が起こるかわからぬ。うっかり方向を間違えると自分のテントを見失う恐れすらある。

風は小石のような雪と一緒に唸り声をあげて襲いかかってくる。

このような状況になったとき、大切なのは仲間に対する信頼である。

この点、私達は大いに恵まれていた。相互信頼は絶対だったのである。

時間はイヤというほどある。しかも下手をすると一週間の停滞である。

萩原が提案してきた。

一　みんな知っている歌を出し合って、それを覚えて全員で歌おう。

二　何でも知っていること、学問のことでも、仕事のことでも、歴史でも、文学でも、それを一人ずつ順番に話そう。

三　みんなそれぞれの生い立ち、終戦の頃のこと、山を登り始めた頃から神戸山岳会へ入るまでの山歴を全部話そう。

四　もし、彼女がいたら、その子のことを話そう。

五　聞きたいことは遠慮なく聞こう。

但し、生きて帰った時、このテントの中で話し合ったことは、誰にも喋らぬこと、というものであった。

今となっては、何を話し合ったか殆ど覚えていないが、少なくとも退屈したという記憶は全くない。誰かが話している時に、横から口出しをして、混ぜかえしたりして、とても楽しかったということしか思い出せないのである。

萩原の、造船旋盤工の仕事の内容や、岸本の、鉄を溶かしてボルトやナットを作る話なども面白く、特にそれぞれが山を登り始めた時のことや、第十三信で紹介した、私と萩原との

出会いの時のこと、その後の入会の経緯など、話題に事欠く筈もなく、更に歌に至っては、ロマンチストの萩原が仕事場から不要になった青写真を持ち出しこれを綴じてノートにし、山の歌は勿論、いい歌を沢山書いて持っていたので、これを三人で首つき合わせて歌った。実に楽しかったなあ。

この時に覚えた歌で、

♪守れ権現、夜明けよ霧よ、
　山は命のみそぎ場所
雨よ降れ降れ　ざんざとかかれ
　肩の着ござは伊達じゃない
風よ吹け吹け、笠風吹き飛ばせ
　笠は紅緒の荒結び
何を奥山　道こそなけれ
　水も流るる　鳥も鳴く

坊がつる賛歌の

人みな花に酔う時も、残雪恋いし山に入り
　涙を流す山男　雪解の水に春を知る

など、五十年近くも前のことなのに今も私の好きな歌となっている。

確か三日目の夕方だった。誰だか思い出せないが、良い歌が出来たと言い出した。串本節の替え歌だという。

♪ここは串本、向かいは大島
　仲を取り持つ　巡航船

が見事な歌になった。

♪ここは鹿島　向かいは剣
　仲を取り持つ　黒部峡谷

というものである。

猛吹雪のなかである。

数メートル先も見えないのに剣は勿論、黒部の谷も全く見える筈がないのであるが、その歌を聞いた時、私の胸の中では、剣も黒部もはっきりと見えた気がした。

「素晴らしい、みんなで歌おう」

と、何度も合唱した。

歌っているうちに、この数日苦しい中を語り合い歌い合ったことなどが胸に迫り、思わず涙ぐんで、ふと見ると他の二人も泣いていて、そして笑い合った。

更に忘れられぬ思い出がある。確か二日目のことである。

どうにも空腹であるが、我慢するしかない、と思っていたところ、萩原が突然、

「おい、あの福神漬は惜しいことをしたな」と、言い出した。

すき焼きの夜に萩原が

「もういらないな、捨てるぞ」

と、言って、信州側に捨てたあの福神漬のことである。

「そんなこと今更言っても仕方ないだろう」

「いや、俺は今からあれを探しに行って来る」と、言い出した。

とんでもないことである。

確かにテントを張った場所から、信州側の谷へ切れ落ちているところ迄は、見たところ十メートル位はある。多分福神漬はその間に埋っているに違いない。然し、その十メートルの先端部分は雪庇になっている筈である。

雪庇とは、強風が吹き付ける尾根などで、風下へ向かって雪が庇のように張り出して出来るもので、後立山連峰では、黒部から吹き付ける風に沿って信州側へ張り出すのである。

つまり萩原は福神漬をこの雪庇の方向へ投げ捨てたのである。

「雪庇を踏み外したら、全員一巻の終わりだぞ。福神漬なんかどうでも良い。止めとけよ」

と、言ったが聞かない。

目出帽をかぶり、ゴーグルを付け、オーバーズボン、オーバー手袋、ウィンドヤッケ、オーバーシューズ、それにアイゼン、ピッケル、

と、完全装備をした上で、ザイル確保をしろ、と言う。

そして、風雪が吹き荒れる嵐の中へ、テントから五メートル以上は信州側へ踏み出さないという約束で福神漬を探しに出て行った。

数時間でテントが埋まるほどの雪嵐である。ちっぽけな福神漬の袋なんか見つかる訳がない。萩原のザイル確保は岸本がやった。何しろ岸本は私と違って、身体が頑健そのものであり、如何にも頼れる男であった。テントの中のキスリングザックや重量のあるものは全部集め、それを岸本のビレイピンにした。

萩原が出て行ったのが午前九時頃のこと。昼になっても戻ってこない。

「おい、居るか？」

と、聞くと、岸本はザイルを少し引っ張って手応えを確かめ、
「うん、居るぞ。何だか少しずつ動いている」
と、まるで魚を釣っているようなことを言う。
「あまりザイルを緩めるなよ。萩原が調子に乗って雪庇を踏み外したら、テントもろとも俺達も一緒に一巻の終わりだぞ」
などと言いながら、私たちはとりとめもない会話をしていた。
午後の二時を少し廻った頃だったと思う。漸く萩原が帰って来た。
頭の先から足の先まで、どこもかしこも隙間なく全身真白に凍り付いている。
そしてオーバー手袋の上から何やらぶら下げて大声で叫んだ。
「あったぞー」
何という男だろう。当時、萩原は二十三歳の若さである。この精神力、忍耐力はどうだ！
そして仲間の気持ちを引き立たせるのに全力を傾けているではないか。
四時間も五時間も、どこもかしこも真白の世界の中で、一人風雪と闘い、只管、雪の中へピッケルを突き刺して小さな袋を探し続けたのである。こんな男は滅多に居るものではない。事実これ以後今日迄、私はこれ以上の男に会ったという記憶が無い。
なんと情緒豊かな心の持ち主であったのだろう。そして、激しい情熱の持ち主でもあったのだ。
この福神漬は最後迄私達の食事の友となった。

・・・・・・・・

鹿島槍南峰ピーク
撤退に成功した朝
右端 筆者　左へ岸本、野上

命からがら鹿島槍吊尾根から帰ってきて、二週間ほどたったとき、突然、萩原から連絡が来た。
「おい船橋、鹿島から見たあの剱岳へ行かないか。俺たちだけでは無理だから、大樫さんを誘って」
と言う。私は一も二もなく承知して、二人で大樫さんを誘いに行った。大樫さんは、前述の鹿島槍吊尾根の時のリーダーだった人で、当時川崎重工の購買課長だった。

私たちの願いを快諾をしてくれて、そして、剱岳の生き字引、と言われた三宅さんに声をかけてくれた。三宅さんも、よし、行く、と言ってくれた。三宅さんは初めて剱岳に入ったのが昭和十六年だった、という人である。たしか製紙の事業会社を経営しておられた。もうひとり、学校でも神戸山岳会でも、先輩だった岡崎さんも、同行を承知してくれた。この人は、ダンディーに軽々と山を登る人で、しかも豊かな情緒の持ち主で、この当時、すでに画家としても名をなしていた。

この年は、豪雪だったこともあって、剱岳本峰にテントを上げるのになんと四日も要したのである。

本峰直下の垂直の岸壁は、厚い氷に覆われ、さすがの萩原も、てこづった。映画「剱岳 点の記」に登場する岸壁である。その萩原の様子を見ていた三宅さんが、

「よし、俺がやる、替れ」

と言って、アイスバイルでバンバンと氷を砕き、岸壁を掘り出してぐいぐいと登っていった。そしてザイルをフィックスして、

「よし、登ってこい！」

と声をかけてきた。私たちはそのザイルを頼りに登った。萩原は、ただ、口をぽかんと開けて、呆然と三宅さんが登る姿を見ていた。そしてただ一言、

「ふうむ、すごいなあ！」

と感嘆の声をあげた。

剱岳本峰
左端 筆者　右へ岡崎　三宅　萩原

本峰にテントを張ったその翌日、そこから東面へ。

長次郎の雪渓を降って八つ峰の五六のコルへ登り岩稜を辿って本峰へ攀り返した。

第一級のアルピニストが味わう、ナイフリッジの素晴らしいルートだった。

長次郎の雪渓を降るとき、ほとんど膝まで潜るラッセルの中を、悠然と降っていく三宅さんを見て、萩原が、

「おい、船橋、ここで雪崩れたら一巻の終りやな」
と呆れたように言ったことをよく覚えている。
八つ峰のナイフリッジでは、少し黒の斑点が出かかっていた雷鳥が一羽、カオーッと一声鳴いて飛んできて、私たちを、何をしているのだと不思議そうに眺めながら、そのナイフリッジを、軽々と、ぺたぺたと、先に歩いて行った。
雷鳥のラッセルだった。

八つ峰六峰ピーク

その翌日、早朝暗いうちから起き出して、軽く乾パンをかじって、本峰から西へ、早月尾根を降った。剱岳西面の拠点、馬場島へ降りきったときは、ほぼ放心状態だった。一週間のいい山行だった。

さてこの翌年、昭和三十四年の秋、萩原が
「おい、屏風の中央カンテをやらないか」
と声をかけてきた。
この年の夏、私は馬場島を拠点に白萩川を遡り、小窓尾根を乗越して池ノ谷に下り三の窓にベースを置いて、剣尾根中央ルンゼ、チンネ左方カンテなど剱岳有数の岸壁を攀っていた。しかし屏風岩は、いつも私の心のどこかに大きな存在として立ち塞がっている岸壁で、これをなんとかして攀りたいと思っていたので快諾をした。
屏風岩は上高地から梓川を遡り、横尾から涸沢へ入っていく横尾本谷からその全貌が望まれる。―冒頭の写真をどうぞ―
前穂高から伸びる北尾根が梓川に至り、そこですっぱりと切れ落ちる岸壁が屏風岩である。

前穂高北尾根
この先端に屏風岩

穂高、涸沢へ行ったことのある人は、この雄姿を見たことがあるだろう。
高度差約八〇〇メートル。下半部の岸壁は、ほとんどブッシュ帯に覆われている。中央部の八高テラスからの上半部はほとんど垂直である。
この岸壁の中央部に突き出たように張り出ているのが、中央カンテである。屏風岩中央カンテ。アルピニストの憧れの岸壁である。
快諾をしたものの私は、この年、山を登ることに執念を燃やしていて、お金はもちろん、休暇も使い果たしていた。萩原は、その私の事情を理解して
「横尾にテントを張って待っている」
と言ってくれた。
私はギリギリの日程を組んで、大阪駅発夜八時の準急「千曲」に乗り込んだ。ぐっすり寝込んだが、肌寒くなって目が覚めた。木曽福島。千曲の次の停車駅は、薮原。薮原では、おんたけ交通のバスが待っている。
このバスはなかなかのバイタリティで、中山道から分かれて、乗鞍岳へ至る野麦峠への分岐点へ登り、そこから東北へ、梓川の奈川渡に至る。
この日のバスの乗客は私一人。あとは運転手と車掌、三人で走るのである。
ひどいおんぼろバスで、しかも、でこぼこ道。体はバンバンと跳ね上がるのだが、それでも私は寝た。上高地へ着いたときはほっとした。
この頃の上高地には人はほとんどいなくて、朝靄の中静かな佇まいを見せていた。ぶらぶらと歩いて、徳沢を越えて、横尾で萩原に会ったのがお昼過ぎ。
この日は双眼鏡で、明日挑戦する屏風岩中央カンテを飽きずに何度も見て過ごした。
静かな紅葉の中にある横尾の佇まいと、そこに垂直にそそり立つ屏風岩とは、鋭いアンチテーゼのようで身も心もぐいと引き締まる思いがした。

さて翌日。天候は曇り。しかしこの曇り空、午後には大雨となったのである。

この当時天気概況は漁業気象の名で放送されていたが、この概況から天気図を作成するには、どんなに頑張っても十一時半まではかかる。漁業気象の放送は、夜の十時である。翌早朝、早くにテントを出発したいと願っている者にとっては、天気図作成は無理である。しかしこの事実のために、私たちはひどい目にあった。

翌朝、屏風岩中央カンテの取り付き点に達したころ、ようやく夜が明けてきた。

横尾本谷を遡り屏風岩の第三ルンゼ、第二ルンゼを右に見てトラバースしてきた。この取り付き点までに二時間ほどを要した。

登攀拠点を確保し、ザイルを結び合って登攀を開始した。覚悟はしていたのだが、この岸壁の下半部は灌木のブッシュに覆われているので、なんとも、すっきりしない登攀となった。岩を登っているのか、木登りをしているのかわからないようなルートなのだが、やはり高度はぐいぐいと上がっていく。

岸壁から突き出たブッシュの間からは、遙か下に横尾谷が見える。しかし悪いことに、雨が降り始めた。下方の情景は白いもやに遮られて何も見えなくなってきた。

このような状況でまだ攀り続けるとは、正気の沙汰ではないのだが、何しろ休暇がない。使い果たしていてゆとりはないのである。だめかと思いながら、なんとかならないかと、私はザイルのトップに立って攀り続けた。

三時間ほども攀り続けただろうか、目の前に、岸壁から突き出るように伸びてきているダケカンバの白い木の幹に水筒がぶら下がっているのが目に飛び込んできた。

「おい、萩原、誰か知らないが、水筒を落としたらしいぞ。ひどい目にあってるぞ」

と、下から登ってきた萩原に声をかけた。

そこからブッシュに悩まされながら岸壁を少し攀って一休み、と思って上を見上げると、驚いたことには、破れたザックと、ぐるぐると巻いたままのザイルが、ダケカンバに引っかかっていて、これは何ごとだ、と呆れる間もなく、そのザックの上の、木の枝にくの字になって、人がぶら下がっているではないか。

誰か滑落したのだ。

ブッシュ帯だが、ほとんど垂直の岸壁なので油断したら滑落する。命はないのだ。

私は萩原に声をかけた

「おい、誰か死んでいるぞ」

萩原は驚いて、ぐいぐいと私のところまで攀ってきて、そして

「おい、船橋、ポケットを探れ」

「嫌だよ、おまえが登ってきて自分で探れよ」

「なにを言うか、おまえはトップだろ、トップなんだからしっかりやれ」

と私に押しつけてきた。やむを得ない。ここでトップを替わるのは、それはそれでスタンスを入れ替わるなど大変なリスクがある。

仕方がない。

萩原にビレーを頼み、思い切って死体のポケットを探った。左上のポケットに手帳が入っていて、中を見ると、中部日本新聞社〇〇〇〇と名前が書いてある。

この死体を下ろすには、二人ではとても手に負えない。

このとき私たちは、攀り続ける気力を失っていた。

雨は本降りになっている。降るしかない。

手帳をポケットにしまい込み、降りを開始する。雨の中、全身ははすでにずぶ濡れである。岩とブッシュと灌木と、なんともすっきりしない降りである。

こんなに攀ってきたのか、と思うほどの高度がある。下方は何も見えない。攀ってきたルートをそのまま降ることは不可能である。

ここからは懸垂下降の世界となる。

ビレイピンを探して四〇メートルザイルをダブルにして垂らし、このザイルを体に巻き付け、岸壁に足をかけて降る。この懸垂下降の技術力は、萩原と二人、お互いに信頼できる。しかし四〇メートルをダブルにすると二〇メートル。これを使い切って降ってそこに確保点が見つからなかったら、絶対に助からない。力尽きて滑落する。せいぜい一〇メートルか一五メートルの地点までに確保点を見つけなければならない。この降りに三時間ほどもかかっただろう。

降りきったときは、精も根も尽き果てていた。二人、ものも言わずに、横尾本谷へ向ったが、今朝のトラバースルートで見た二本のルンゼは、なんと、ごうごうと滝になっていた。くぐり抜けるのにその滝の水をもろに被った。

横尾のテントまで戻り、一休みしてすぐに横尾小屋へ行って、墜落死体にぶつかったこと、手帳を持ってきたので、身元はこれ、と説明した。

小屋の主人からは、丁重にお礼を言われた。

この後テントで一晩、どんな食事をし、どんな話をしたのか全く覚えていない。なんともやりきれない思いだったことは確かである。

翌朝は快晴。しかしもう時間がないのだ。

テントを畳んで、中央カンテを見上げると、死体が身につけていた、オレンジ色のヤッケが遠望できた。そのオレンジの色が、物凄い勢いで迫ってくるように思えた。

そのまま梓川を上高地へ下った。

徳沢の手前で、数人のガイドとともに、ご年配の女性を囲むようにした家族連れと思われる一団と出会った。

萩原が近づいていって、毅然とした姿勢で

「私たちが屏風岩を攀っていて〇〇さんにお会いしました。お悔やみ申し上げます」

とこれは驚くほど立派に挨拶をした。

おそらくご母堂だろう。何も仰言らずに深々と頭を下げられた。

萩原と二人での屏風岩中央カンテはこうして終わった。

この翌年の正月、ＮＨＫのラジオニュースが、東京の名門山岳会、第二次ＲＣＣのメンバーが中央カンテの積雪期登攀に成功した。と伝えていた。
ああ、これで終わったな、と、私はなんだか呆然とした思いにとらわれた。

撤収の朝　横尾にて
筆者

エピローグ

あれから半世紀以上のときが過ぎ去った。
このエッセイに登場した人たちは、みんな、この世を去った。
私ひとりが生き残っている。
歳を重ねてきた今、私の胸のうちは若かったころの純な思い出と、澄みきったようにも思える今の心境とが混じり合っている。
しんとしたような思いである。

胸の中に描き出す過去は、遠きも近きも一瞬に重なる。
今はその過去に分け入るよる先に、みんながもういない、という思いのほうに胸を占められて・・・・　　佐多稲子　夏の栞

しかし若いときには、若い心で生きていくよりない。
純な青年時代を過ごさない人は、深い老年期を持つことも出来ないのだ。
倉田百三　出家とその弟子

二〇二五年　四月二十五日

勝ビキ亭山人